13 学年度第一学期ユーラシア財団（from Asia）国際講座
「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座（4）

テーマ：仏教の東アジア変容から見る日本仏教：最澄の大乗戒を例に

涂玉盞　教授
（2024.10.03）

要　旨

一、はじめに

本講座では「仏教の東アジア変容から見る日本仏教：最澄の大乗戒を例に」をテーマとして講義を行う。講義では、まず米国ピュー研究所の「世界宗教概観」と、日本が毎年発表する「宗教年鑑」を述べ、次に仏教信仰者のアメリカおよび日本での分布状況を紹介する。その後、仏教の伝播、日本仏教と戒律を通じて、東アジア仏教の変容の中における日本仏教の特徴を述べる。

二、日本の宗教信仰

宗教学者・阿満利麿氏の『日本人はなぜ無宗教なのか』では、「日本人は無宗教であると言われるが、それは創唱宗教に対して相対的にそう見えるだけである」と述べられている。創唱宗教とは、特定の教祖と明確な教義を持つ宗教のことである。キリスト教、仏教、イスラム教がこれに該当し、一方で、ヒンドゥー教や日本の神道には特定の教祖が存在していない。日本文化庁が毎年発表する『宗教年鑑』によると、日本の「宗教信仰者数」は「総人口」を上回っている。これは、日本人の一部が複数の信仰を持つと考えられる。2023 年の『宗教年鑑』では、神道の信仰者（51.5%）が仏教の信仰者（43.4%）を上回っていることが示されている。

三、仏教は哲学か宗教か

アリストテレスの有名な言葉に「哲学は驚愕から始まる」がある。この「驚愕」は、生命の中にある恐怖感を指すと解釈されている。ショーペンハウアーは「哲学と宗教はともに人類の形而上の欲求を体現したものであり、無常な生命への応答として発展した結果である」と述べ、シュヴァイツァーも「生命への畏敬に基づかない宗教や哲学は、真の宗教や哲学とは言えない」と述べている。

一般的に、哲学は理性を基盤とし、理性による分析を通じて認識することを目指す。一方で宗教は信仰に基づいてできたものである。しかし、理性は万能ではなく、解決できない問題も多く存在する。また、宗教の形成には歴史的な背景があり、単に突然生まれるものではない。哲学は少数派であることが多く、社会的な影響も限定的であるが、宗教が社会問題となると、民族、言語、経済、政治、さらには軍事と複雑に絡み合い、大きな影響を及ぼすことがあるり、注意すべきである。

では、仏教は哲学なのであろうか？それとも宗教なのであろうか？その答えは仏教そのものに立ち返るべきである。

四、仏教の八万四千法門

仏教は紀元前6世紀、35歳で悟りを開いた釈迦牟尼仏（以下、釈尊）によって創唱された。釈尊は悟りを開いた後、49年間にわたって説法を続け、その法が弟子たちによって経典や律としてまとめられ、中国には経（1420部）と律（84部）が伝わった。仏教の中心思想は「離苦-得楽」であり、究極の目標は成仏することである。しかし、成仏の方法は人それぞれで異なり、釈尊は「八万四千法門」を説いた。その内容には、般若や中観、唯識といった哲学的思考を要する教理も含まれている。釈尊は、弟子たちに仏法を聞いた後は熟慮し、真剣に修行するよう説いている。

五、日本仏教の特色—戒律を中心に

仏教はインドを発祥とし、日本仏教の特徴が世界に広がっている。仏教の伝播経路は、南方の南伝仏教、北方の漢伝仏教、西蔵系仏教が挙げられる。特に漢伝仏教は中国を源とし、韓国や日本に伝わり、東アジアにおける精神的支柱

として2千年以上の歴史を持っている。これにより、大乗仏教を特徴とする漢字文化圏仏教、いわゆる東アジア仏教が形成された。

日本仏教は中国から伝わったが、その受容において中国仏教とは異なる特徴を示している。まず、日本仏教は「現世中心」の考え方で、仏教の「現世超越」の思想を解釈している。聖徳太子の『法華経義疏』巻四には、「常に坐することを好む少乗の禅師に親近せざれとなり。…私釈少しく異なり。…今、之を須ひず」がある。

以上から、元来、仏教は都を離れて静寂な場所で禅定を行う修行を主張していたが、聖徳太子はこれを小乗禅師の行いと述べ、俗世の生活の中で真理を実践し、国家を安定させることを重視する解釈を示した。これは日本仏教の特色の重要な要素の一つである。次に最澄の大乗戒を例に挙げて、日本仏教の特色をみる。

戒律は仏教教団の生活規範ともいえるものであり、戒律なしでは教団組織の成立は困難である。中国の鑑真（688－763）は、中国の僧侶が実践する「四分律」（小乗戒に属する）を日本にもたらした。中国では、僧侶が戒律を受ける際に大小両方の戒律を受けるのが一般的である。小乗戒は僧侶の日常生活を規範とし、大乗戒（菩薩戒とも呼ばれる）は修行者の心の動きを理想として規範化したものといえる。最澄は大乗戒の精神の根本を「真俗一貫」にあると述べている。「真」は出家者を指し、「俗」は世俗の信徒を意味する。最澄（767－822）は、出家と在家信徒が同じ戒律を守るべきであると主張した。

六、結論

最澄が大乗仏教において大乗戒のみを採用し、小乗戒を不要とした主張以来、日本仏教における戒律は徐々に緩やかになり、後世の日本僧侶が世俗的な生活を送る契機となった。鎌倉時代に至り、法然（1133－1212）は戒律を守るか破るかに関わらず、念仏さえ唱えれば極楽往生できると説いた。実際、法然の教団では戒律を軽視する行為が見られ、「造悪無碍」と称される行動が横行し、一時的に社会問題となった。親鸞（1173－1263）は越後への流罪中に還俗を余儀なくされ、これを契機に「非僧非俗」を提唱した。親鸞の妻帯生活は浄土真宗の特徴となり、明治以降には他の宗派にも広がり、日本仏教の一つの特性となっている。

中国語要旨・まとめ 凃玉盈
日本語翻訳　葉淑華
2025.01.09